

## 聴く行為からみた祖父母と孫の貴重な報酬とは？

Do Elderly People's Valuable Benefit in Relation to Grandchildren's listening Act?

平賀 明子  
Akiko Hiraga

### 要 旨

本稿の目的は、孫である学生の聞き取り調査から祖父母と孫の関係のあいだにある貴重な報酬について調べることである。調査の対象者は60歳から80歳までの札幌近郊の118名の高齢者である。アンケートの項目は、調査対象者はどちらの祖父母か、孫との接触頻度、祖父母が孫に伝えたいこと、調査から受けた両者の印象の4つからなっている。結果は以下のとおりである。1) 調査を受けた祖父母は父親の両親よりも母親の両親の方が多い。2) 半数以上の高齢者は少なくとも一週間に孫と頻繁に接触していた。3) 祖父母が孫に伝えたいことの一番大切なことは、思いやりの心であり、2番目はよいしつけであった。4) 祖父母は孫と話すことを楽しみ、孫は聞くことの重要性を学んだ。

キーワード：貴重な報酬、祖父母と孫、聴く行為

### A B S T R A C T

The purpose of this paper is to investigate about the valuable benefit between of elderly people's grandchildren, based on listening act of their grandchildren. An interview survey was conducted among 118 elderly people living near Sapporo, ranging from 60 to 80 years old. The questionnaire was constructed of four items: which side those who were investigated, how frequency contact with grandchildren, what they want to transmit, and an impression of both elderly people and grandchildren. The survey results are as follows:

- 1) Elderly people who were investigated were more mother's parents than father's parents.
- 2) More than half of those who contacted with grandchildren met at least once a week frequently.
- 3) First valuable things what elderly people want to convey their grandchildren was gentle mind, second was well discipline.
- 4) More elderly people enjoyed talking with their grandchildren, and more grandchildren learned the importance of listening behavior.

Key Words: valuable benefit, elderly people and grandchildren, listening act

### はじめに

本稿の研究の目的は、対人関係を良好なものにするには報酬と負担のバランスを考慮することが重要であり、そのことは祖父母と孫のような親族関係にもあてはまることを明らかにする

ことにある。ただし、ここで述べている報酬と負担のバランスには、“聴くことは最大の報酬である”というような経済効果以外の目にもみえない社会心理的な要因が含まれている。さて、日本には昔から「情けは人のためならず」とい

う諺があるが、この言葉に含まれる本来の意味を正しく解釈されることは意外と少ない。授業のなかで学生達にその意味するところを尋ねてみるのだが、かれらの多くは自信なげに首を傾げ「わからない」と答える。この諺を正しく解釈するためには実は後半部分である「情けをかけておけば、巡り巡って自分によい報いが来るということ」(出典：大辞林)に着目しなければならぬ。すなわち、人に親切にしておけば、それはやがて巡り巡って最終的に自分の利益に結びつくというギブアンドテイクの対人関係である。しかし、人は一般に対人関係、とくに血縁関係や愛する人との関係にこのようなギブアンドテイクの交換を内包する自己利益追求の解釈を好まない。“愛”に自己利益の追求は似合わないというわけである。果たしてそうなのだろうか？ 例を挙げてさらに考察をすすめてみよう。

ここに一人の女性高齢者がいるとしよう。彼女は足腰も弱り耳も遠くなっているので、外出や家事をするのも人の手助けが必要であり、なにかと不自由を感じている。彼女はいまでは人の世話を受けるばかりで、世話をしてあげる立場にはいない。このような彼女の立場を一般的な報酬と負担のバランスからみてみると、人から援助を受けるので報酬は大きく、援助を与える立場にないので負担は小さいということになる。しかし、高齢者本人の立場から解釈しなおすとどうだろうか。世話を受ける一方の彼女の立場は、気持ちのうえでは報酬は小さく、お返しのできないので心理的な負債も大きい。つまり、報酬と負担のバランスは立場によってまったく異なる解釈が可能なのである。このような彼女の立場を衡平理論では「過大不衡平」と呼び、お返しをすることによって心理的な均衡状態になるといわれている。

## 1. 日本の祖父母と孫の関係

では高齢者にとってどうすることが心の負債を小さくし、どのようなお返しをすれば心理的な均衡状態を保つことできるのだろうか。先に議論を進める前に、これまでの高齢者と孫の関係を明らかにした先行研究からみてみよう。日本の家族社会学者の知見によると、わが国が他の欧米諸国に比べて既婚の子どもとの同居率の高さを支えてきた要因の一つに、孫の存在がある。すなわち、孫は高齢者にとって「目に入れても痛くないほど可愛い」といった情緒的な欲求を満たすだけの存在だけでなく、子どもや子どもの配偶者に代わって孫の世話をするといった周延的・補助的な役割を担う価値欲求を満たす存在でもあった。そこには同居によって得られるギブアンドテイクといった報酬と負担のバランスが存在していたために、高齢者が一方的に援助されていると感じる必要はなかったのである。しかし現代では、経済的な豊かさ、年金の充実、プライバシーの尊重といった様々な要因が加味されるにつれ、これまでのような高齢者と子どもとの同居形態を支持する家族は減少傾向にある。このことはおそらく、孫との接触から得られる情緒的な報酬と孫の世話をするといった負担のバランスによる高齢者の心理的均衡にも影響を与えているのではないだろうか。一方、欧米の祖父母と孫の関係は日本の先に述べた家族形態とは異なり、子どもとの近居によって良好な関係を維持すると考えられている。たとえば、イギリスとアメリカを中心とした親族関係の研究では、高齢者にとって親族は重要な意味をもっていることが明らかにされている。しかし、日本の祖父母と孫の関係のように、同居によって高齢者側の欲求を満たすといった明確な家族規範が存在しなかったために、孫の存在が高齢者にどのような意味づけを与えてきたかは明らかではない。高齢者にとって親密さを感じる順序、あるいは援助の資源と

して認知する対象はあくまでも成人した子どもであって孫ではないからである。さらに注目すべきことは、欧米ではかなり早くから息子よりも娘に依存を強める傾向がみられ、配偶者を亡くした男性高齢者ではその傾向がより顕著になる。また、接触の比率も普段どのような関係を築いているのか、共通の価値観や親しみの程度、一緒にいて楽しいかどうかなどが反映されている。本稿では、以上述べた報酬と負担のバランスから祖父母と孫の関係を捉え、与えられる報酬ではなく、“聴くことは最大の報酬である”という与える報酬の観点から、学生がどのような報酬を与え、また受けたのかを祖父母世代への聞き取り調査から明らかにしたい。

## 2. 研究の方法

授業の一貫として学生たちの祖父母あるいは近隣の祖父母世代に聞き取り調査するよう学生に依頼した。調査の実施時期は2000年12月～2001年1月である。調査に参加した学生は「生活文化」受講者118名であり、聞き取り調査の対象者も同数である。データの分析はSASによる統計解析入門を用いて行った。

## 3. 結果

祖父母と学生との血縁関係は、父方の祖父10名(8.5%)、父方の祖母20名(16.9%)、母方の祖父27名(22.9%)、母方の祖母54名(45.8%)、その他7名(5.9%)であり、母方の祖母が対象者として最も多い。対象者の年齢構成では69歳未満が17名(14.5%)、70歳以上74歳未満は39名(33.9%)、75歳以上が59名(51.3%)であり、75歳以上が半数以上を占めている。学生との居住形態では同居は20名(17.4%)、歩いて10分は16名(13.9%)、車で30分位は23名(20.0%)、市内近郊は15名(13.0%)、その他41名(35.6%)であった。接触頻度は少なくとも週一回(毎日を含む)が

28名(24.6%)、月に2,3回程度は20名(17.4%)、月に一回以下は66名(57.9%)である。週一回会う頻度は本調査では24.6%だが、この比率は授業のなかで紹介したイギリス調査65歳以上の高齢者が成人した子どもと「今日」あるいは「昨日」会う頻度69%に比べるときわめて低い数値である。では祖父母世代は孫世代になにを伝えたいと思っているのだろうか。本調査では義理人情、伝統的な行事、思いやり、金銭感覚、しつけの5項目を複数回答で尋ねている。その結果、「思いやり」を挙げている人が99名(33.4%)と最も多く、次いで「しつけ」70名(23.6%)、「義理人情」47名(15.9%)、「伝統行事」と「金銭感覚」が同数の各40名(13.5%と13.5%)となっており、「思いやり」の感情を大切にしてほしいと感じている祖父母世代が浮き彫りにされた。

・データに載らない祖父母から孫に伝えたいことは以下のとおりである。

1. 昔の遊び、和服の装い、善悪、質素な暮らし 2名
2. 正しい言葉遣い、女性らしさ 3名
3. 人間的感情 1名
4. 先祖を大切にすること 2名
5. 親のありがたさ、親族の重要性、人を嫌いにならないこと 5名
6. 伝統的料理、伝統行事 3名
7. 他人を思いやりいたわる気持ち 1名
8. 一般常識、社会的常識、教育 4名
9. 自分が今までに身につけた技術 1名
10. 戦争の歴史、戦争の怖さ、平和の大切さ 3名
11. 食事のマナー、敬語の使い方、礼儀 2名
12. 健康的な生活 1名
13. 忍耐、目上の人を敬う気持ち 1名
14. コミュニケーションの必要性、会話 2名

- ・ 孫世代が祖父母から受けた感想は以下のとおりである。
- A. 祖父母は恩や義理、上下関係を非常に重んじ、報酬を受けた場合はしつこいほど返礼をする。相手を思いやることは大切だが形だけのつきあいは必要だろうか。身内では好意はあたりまえのものとして報酬を望まないし、報酬を望まない関係がよい人間関係を作るのではないかとも思う。
- B. この聞き取り調査のおかげで、祖父母の家に行き話す機会を持てたこと、祖父母は伝えたいと思っていたことが理解してもらえたことと自己肯定感を持てたこと、会話が広がり楽しい時間を持てたことが報酬の結果と言えると思う。
- C. この聞き取り調査のため、今まであまり話す機会がなかった祖父母と長く話す機会ができたことがよかった。普段聞けないような祖父母の考えを知ることができ、相談し合って丁寧に調査に答えてくれた祖父母は何となくうれしそうでもううれしくなった。
- D. 祖母は話がしたかったようで、この調査をもとに2時間も話した。終わったとき「ありがたいとね。楽しかった。」と感謝された。
- E. 高齢で一人暮らしの祖父と話をするよい機会になりました。今まで知らなかった祖父の一面、恐ろしい戦争の話、ありがたい話、自分との共通点を知ることができ、暖かく貴重な話は心に残る宝物になりました。
- F. この聞き取り調査での祖父母の考えは今まで一緒に過ごしてきた中で十分伝わってきていたと思います。何を重要だと感じているかという答えの内容が私の考えとほぼ同じでした。
- G. 祖母は思いやりと伝統的行事を特に大切だと思っているようで、それをしっかりと形にして伝えています。私は小さいときから年末に祖父母やいとこ達と集まって毎年欠かさず杵と臼で餅つきをしているし、またお正月やお盆も必ずみんなで集まっています。
- H. 祖母が今まで伝統行事に力を入れていたのは私たちに伝えたいためでもあった、ということを知った。
- I. 人は話をしなければ相手のことを理解することができない、という根本的なことに気づいた。祖父との会話から昔と今の違い（人の考え方や近所づきあい等）に驚いた。
- J. 本当に大切な人、無条件に愛せる人（両親、兄弟、親族）との関係では「報酬」という言葉はそぐわないような気がしますが、今回の調査で祖母と楽しい時間を共に過ごせたことは確かです。
- K. 祖父母世代は孫世代に伝えたいことがたくさんあるのだ、と知りました。ただ現代は核家族が多く、大切なことをなかなか伝えることができなくなっていることはとても残念だと思いました。
- L. 祖父と話し、世代と共に価値観が違うことを感じた。また現代の人間関係と比べて、昔の人のほうが暖かく人情があったのだろうと感じた。
- M. 世代によって考え方の違いがあることを感じた。祖父母世代はいろいろな知識と経験があるので、1つの物事に対して孫世代の気づかないような見方もできるのだと思う。同居なので祖母から日々さまざまな見方、考え方を学んでいます。
- N. 祖母は家族のお祝いや誕生日を大切にしているので、それで母方の親戚は皆仲がよく集まるのが好きなのだ気づいた。伝統的行事もずっと続けており少々面倒くさいと思っていたが、祖母の話しを聞いてこ

れからも続けていこうと思うようになった。

- O. 祖父母の考えは今の孫世代のものとなんまり違うことがわかった。しかし長い人生を生きてきた経験が祖父母の現在の考え方につながっていると考えると、その知識は否定できないし、現代の孫世代の考え方は非常に甘いのではないかとも思った。祖父母世代の人の考え方を聞くことも大切ではないかと思う。
- P. 調査の結果を見て、祖父が孫たちに伝えたいと思っている事や重要視している事が私とほぼ同じであることがわかった。たぶん祖父から母に、母から私にと伝わったものだと思い、祖父を身近に感じる事ができた。

#### 4. 考察

本研究では「聴くことは最大の報酬である」という観点から祖父母世代に聞き取り調査をさせ、そのことによって学生たちに聴くことの大切さを実感してもらうことを目的とした。学生たちの感想をみても明らかなように、普段とは異なる「あらためて聞き取る」という行為は祖父母との関係にまた新たな出会いをもたらしたようである。また、祖父母世代にとっても、孫から授業の一貫として話を聞いてもらうという行為は「聞いてくれて、ありがとう」の言葉に表現される感謝の意も含んでいたようである。特に、孫世代に伝えたいことが「伝統や義理人情」といった儀礼的要素よりも「思いやり」であり「しつけ」であったことは重要な意味をもっていると思われる。すなわち、かつて親族関係は手段的援助、つまり形のある経済的あるいは介護のような援助を中心としたものであったが、いまではより情緒的な関係を孫世代のあいだに求め、その傾向は強まりこそすれ弱まることがないからである。

#### 参考文献

- 布施晶子・玉水俊哲他：IX 現代の老親・子、現代家族のルネッサンス：194-220(1992)、平賀明子・三谷鉄夫、2001「高齢者の子どもの性別による居住分布とインフォーマル・ネットワーク構造との関連」『高齢者問題研究』17：141 - 151。
- 森岡清美、1993、「現代家族変動論」、ミネルヴァ書房。
- M・アーガイル/M・ヘンダーソン、吉森 護訳、1992、「人間関係のルールとスキル」、北大路書房。